五升菴文草 卷四

蝶夢和尚文集巻第四目録

熊野詣の紀行　吉野名乃記

三歩の月費記

熊野紀行

今いにしへ物語りきく度毎に西国の観世音順礼とて
世にかなへる行ひにて世のあはれとてその新しき
みちにはなれぬ行ひ中ごろ年月をへうつ
ほうきわい長者かつらはらくよりはじめ仏法の
器量物を用ゐて湖水をわたる三井の古寺
あとかたもなく無常の心さしはきわまれる比
熊野山のことをいふもやうにきこえ夏草のあとさへ
秋の夜をあはれにみる浦うちとくとうたてしいい
人もまれにうらかなしきあひて八月廿二日より有明の

新のえらみまゐらするは五条の顕昭が家よりうちならびの
かたへゆくきみのみまでは都の事しれしはあきしかりし
後られは此ならのみ渡辺もかくちえて稲の穂なみなよ
見ゆるをうちまかせのれきる小倉といふ里は人の家の中まで
水入りて桜の奥横ならびの調度まで多くよびあつけそ
ゆふ旅人をも里人の身よ人のきよの如く　村の中ほど揺
れし故を常をはつらひも　なき大坂の一頭のうち
かゝりれ飛鳥川の流るゝ安倍のさうし
無し并身のありさまもみつく水のせきいづきたるは
新ま　なし流しもの秋の水もて

やぬれまうりはこえて祇園の祭り見る牛の車も
よろずなり世のうみ行くしの人はまさし童なりし丹真
して南都の法れもまゐりをて此義の疑よやすくせりし
けるに時の維摩会の講師の前駈後家はなしくりはれ
車をやとひして都へのぼりきるにはやりて丹のやむ
童に世もなやく学文をはじめやうて物がれまく学ばんとて
楽車にうちのりて内に集りしさまをなきみやされけると
皆訓行うけるを年経て叶の講師の勅をうけ給りて
都へのぼるとて此義の疑ふてとし丹のいましめをおもひ
出て車はしらかく　懐旧の涙しきりにひきかれしを

[illegible]

秋きりのもれる梢のなかりけり

日ぐらしなれて鳴ひぐらしいよ里よりとをくなる音

戸口より居ながら見るせいたの清水白く

流れ稲穂みてゆく衣せ山の名も竹の

[illegible]

廿三日かい山に雪よりきたる　秋篠の里い秋ぐれ

秋きりのやいなくなる里のうち

飯きりのやうやうあきたる義の中　紀氏

西文章の門ぶの柳の葉もいつたちの

[illegible]の京より山ぶきの

相里より五条七条にかゝる名わり

綿ぶよ鈴鹿の高ぶの西の京

珍皇寺より三条をたゞみの京　紀氏

[illegible]

のこりのうゝひし

[illegible]

角部と[illegible]

雪うやみたる新の竈数

我田のかりよまるおそけるやうる

那山四季おもしろく音もすごくすさまじく八月の所よりやうやう香久山うつる久万

香久山や月も高くなりぬ　文下

廿四日天気よく晴るる時分

徐々なりうつる日和

敵火の山の麓をすぎ高野の麓を経て寺院寺に

参詣おがみ奉りて慈眼視衆生のちかひを

唱る日華の美しきかの如く秀の男を

なぜうしの山に分入れ霊うしと名付し歳の

雨よいくそうしもきつれ如来浄両界入愛宕の

図を彫りうつるのそうこと丸まるのうこと又えん

拝行ぶやいかの所の松かくはもち

樫拝の色うつる吉野を竹一さら取てくいと

ちかれい

夏ゆく六月よはく秋の雨

前能の色もつ又えぬうち飛川　文下

紅葉ちる桜もけうれるうの川　紀代

今割山の麓の茶の花をこれいよ飛川いやきく

ちるうく四の中ばかりもうけり

きうのう程時をこれこれ　文下

畦道よりあれば荷馬こうの
侍乳時より毎年のごとく等定法橋初めて
十五日朝も雨やみ雨やみ移いきの山めいいるなと人々
思ひよる学文改めて

秋毎やかりそめの初入まで　理性

不動坂をあるく毎年のごとく侍れい

高野の山桜花を霧こめてわけもぬ秋の七夜　青長

夕暮れ中より雲出て嵐しくの間ひまなく雲とうに
高ひくひとやみ通る雨あり
あり雲しうち此夜通る人々山見論と始めていねるよ

加うれい親の足ちいさい中ごろ山に登山しうち三度
ある人々山話とや語り通りきしとうと詩よ思ひ出
高ちや足ありくうきい出の霧
芭蕉翁の文毎月ちうに高ちうれしよ山論ちうし
十四夜谷うに行ちうにうちとうに雨よぬまし
神とおのしして田畑表よりてかの行乗とうう
男のこ行れい行ちうきい体よあり家みのけきい
ちうちうかうちのあり心ちうぬ

嵐ちうに雨山のあるよりのあるよりのあるよりきう　青長

まいちうちうよ起出て慣上とおきりうた十七夜五天ちう大塔を

横雲の上より羽へ花の雲の明ちられ山の端よりきりめきり
大内明州の陣よりよりて投る賀茂三鈷の第四の波
濤と飜る山形枝より三鈷の杖にかゝりて
わゝ明ぬる日うらの梢よりうれの新芽ちらもれい

曙や行ゝ蔦ゝ松の月

蛇柳と生えて枝ゝやうく一本ゝうつる

芽のちらゝ枝ちらす柳うな

ちれるも浪やしぬしとみるの玉ゝ千尾

谷の毒蛇の淵よりよりの濤ゝ年ゝて師法の

下ゝ枝の芽を震る新一重ゝ

玉ゝや萩ゝ日うけゝうつれ

奥の院の中廟よりゝ枝枝の芽立みゝく心ゝて宸

ゝ

秋ゝもや師法の高ゝ　文下

寺運法の芽の下ゝ有明の月ゝ詠ゝ秋四の月ゝ

ゝ詠ゝ引ゝ世の印ゝ有明月　吉長

芽の堂ゝ多安の一枝ゝ芽ひゝく

一枝ゝ　恩ゝ　ゝ　鯉代

本食上人ゝ寄ゝ集ゝて光明ゝ言接ゝ見ゝ都の

四ゝ新の河ゝ山ゝ上人の伊ゝ所ゝ

ける上人をやがて召寄せられたるに上人いとせちに
なり禄をさしてをいたく都辺の西院をやがてかたらしし
ゆるせかのまいりてをいたく嘉元の山の麓を
悟婆なるぬ地なるうをを将軍なりもめなりの行住安
行事なるいるとも物まれて建なるこの甲斐を高波仲
武四行をなるとよりをを大時の方をまりて法然上人
学寝上人をれを法を廟なるおもいまるまれい
をもを物をも智なるを思なるを男なるを弱をを等一
仏浄土を土をうをまれ知見法界の利益をなるをまを
大師を為先い祈ををに利利を須陀を加をををのを

今をに思のをまれを心思をを念珠をを寄寝
をを縛邪を魔人を入を道れををを
をををの山物を侍をいの男なるをして年の
貝をを仏小四原谷なをを大風をいのををの
をを義国を元をを高和を魔山を水を峯
いを常を山家を常をしをを入をを
戸都ををを明を人を行ををひを山人のを
をを山家のををいをを人をを同をを
なを山家をを婦を山獄を精神を生をを
竹ををいをれいを廃上をを五十丁金を

しかるに母屋の家一つ足りてもうけ取さ
又新に新屋造りけるを越えて根の足なしいまの
さはりとなりいかなるこまりもなれい
足なやと云ひ九郎判官と驚屋といひ
母屋なりの山家なりとかくしてうる
ものこれ入きれい山なかひ谷とうそて
家なりの家の大股とかくに家とは差て
手のとかくせもとうるの差のはき
しかるやうて槽のやうなるしの
明るや槽かかりけり

九六日夜も明ぬれば雪うちつもりかくしもこれぬ
山とのりて十八丁余り行て柘小家にて家あり上面
水うきし杉平なりの名のあるを道うれ四里半ら
行くに人家あれば行くに此山にて行くに
分ゆくや袖よりかきれ雪のはも
高きにきいの雪をそそりたる　文下
枝ありもなきにけりや蕨也　紀内
鳥なりのあるれへ人をまちうの通ひまの梢
よりも色系なりのの加きまうひ青の系れそ
霧立凝りなりやなりやなりおやなりの草なりやなし

栃もち多し

刈萱よりかや尾上へ山深し

まことの所ハよし野く奥郡十津川ちかく里なし
芋ヶ瀬庄といひし所の傍所なり今五百瀬
村といふ此村の子孫を所々にて所の長なりしとや元享の
ころ大塔宮の熊野より落させ給ふ時此辺にて芋瀬の
庄司発向せしかば的村にていひし此僧の待の旗と
奪ひ取りしも栖をかりし竹の紀なり其地の古れ
山なるよこく大河の流をめぐらし一丈翠を横へハ
茅丈もすこし加ふるに民家ハ栃椿の枝を
架にあの皮を干して村を畑に鹿垣四方に結廻し
人も毛着しなく気生ひたる皮にて作れる裃をき
斧鉞をかけ山刀鉄杖をもみて其の根を掘角をそぐ
わく毎猿のまねをしして髪を生す所に他いふ
すなも古代に物くのつへや冷えてさまへなしいふきまさ
今の世の人とも見えず実に南帝御代の時法師方で
数代に仕へしを尊せられしもかかれ山里の人と
剛直なるゆゑなるべし道の傍に栗をかけるもある
あるは其の実を逐に干しおくもの多し　橡の実となる
冬食ことなきゆゑや山の秋
まつや

てしより稲といふもの絶て生ならけれは草鞋ら
なまぬもなし其日ハ男の日をは履つゝりて
多く商ひ来るしとぞしらぬ目きこ卯比
あやみしひきれも今も此のさる三浦峠茶屋
坂のさしかゝと百所あまり翻り又あさく路いそ
くのうハあるもなし幸して茶屋の里にやる
夜の色もきえてしいふ仏きた茶屋のあさ人
浜のゝ松のありよ此の中

雨の庵し草の戸ゆるよあふひ小

花の香粟飯もまた路しき　文下

花あやや此茶の下ちらきかつ行　紀風

一杖の雲の庵れわすれ義経さ涼しさ　香去

廿八日朝日ちりやよ隠しきれハ蓑笠をぬうく心され
やうにも在る又里坂三行きおよおゆくかつ紙
よある峰かり松人あるく気しや思ひきしかく人の
あやらきの枝しのく杖よせよしてえうせるそ
ろう沙わりくうれし

山村よ杖　呼のける波岸られ

谷川よ渡しの舟かり岩の苔の雨にうゝしもの裨足の
家ありと眠りすりいうしき捨ちくしきあふ庵の

百三里ばかり奥に玉垂の社あり御
神はいとやごとなきものにて
ましますなり　扨八月二日扨と書とてけるきこゝろ
なるべし

そゝぐやゝ四十とせ藤の秋　郁代

青のはの黒ずみ　仕のそゝぐ　文下

きのゝ山ゝ　ぬれはてゝ八尾大谷ゝ
やゝれ

明きいなのおもう毎のうくるけぶ　ゝ
やゝ水上を大きう流ゝけゝ　義全

ゆゝ十津川といふ名つゝやゝ宮ゝあるけゝ
杉の高ゝけゝ

杉ゝ高ゝ高ゝ　ものゝ　仁廉うれ

ゝけゝ基上人ゝ　ゝけ宮ゝ　ゝてゝ立ゝ
ゝゝけゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝ神ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
白き高ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

身舟入来て禁教を禍悪の存文から山四方にかこみ
義を宗し伊宮を通て出雲の方へ行て株門拝殿
廻廊等一宇も残らず焼失し其記を遂うれば
しきくかうのもう

薄刈萱通廊

あしもとにまとれし草の高名の印　紅梅

書長

書長

神格の記を重撰秋成

訓社のはるみ行のうれよまい出まのうえ人を
力をそして高殿の結構をきはめてよりも墓を
しや正真の神の面をかまいまい出

ものもかなく神を記て世にいたるの
まくの考

俗殿のまうけてわれ拝をかくして遷誠殿へ
おくる後白河法皇の宇三成伊幸ありし供奉の
御供和泉武部の情の姫をうれく苦しき
山山と古く式のよみれ梅と桜の
やて新宮の舟をかりてうつるに九里八町
いる道の程左右の家を家ならく時ち廉代を立て
ゝ紅われい枝の情ゝ枝ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ
えもいはぬ物の生ものに布引の滝の口書院
なく名りる瀑布入三千丈れ雲間ゝ有

きたれり。岩間と張るかうの手に枝杓と
いふ。後白河法皇得長寿院を建られし時三年
三間四面の柳の棟あり。山谷の流れ清し。
かの柳の樣に紀氏の手跡にて楊柳寺と書
たる額を掛たり。うらに名を刻しなり。
傳ふ。西岸猿丸峠不止橋毋を過ぎ重
山に減じ竹に叮嚀なる柳寺にて
鳴しなどの方へ山より門入中に
出る山あり新宮の山とたゝへ
白ひく三尺許の緋門廻廊のかゝる格皮

菅の新宮の門を過ぎ城あり市町
なり。人多くにぎはし。別当新宮義人なり
世にいふ九郎の屋敷なり。三熊野の中
にもきこえたる飛鳥社あり。かの伝に秦徐福
入初めて不老不死の薬を求めて五百の童
男童女を伴ひ来りしに此の三山にとゞまり史に載る
所を遂入後の世に欧陽氏といふ人の徐福秦の
世を遁れ日本に渡り経典を持ちて伝ふ
とあり。此を三山に草義山の石碑あり。
うつすに加れり。堀て中の中に一丸あり。年の

箱なるあり

ものゝしや我ならぬ業をかくし人も
それ行きて浜宮て荒妄想の衰微やかゝしきし権現の
山より上り鹿角ゆゝの浦をたどりに波あらく御幸跡し
三輪が崎よ破まてさまよ波高くまた入かりて簑笠を
せまき道なり
九月朔日宮にまいれぬ明けぬより立出て詠るに南の方の
かたへゆく日より入れ物ともなきに朝日さしや更波の
上より出し上るさましていとしづかなるに推量しての
入水し給ひし那智の奥より山を見とりてのや浜成の

すゝきをもかりて林寮あつて立まよ那智の麓の
山里みて日高くはせし行ひめぐりて今も其跡し
これ山里にありし山浦をうかゞひまはりてぞ涼くして
ぬかくれにくうゞりし世しよりまへまさよ山門と
ましきて基石据ゑまして御そなれは基石まよ名残りし
あまくて浜の宮は補陀落山とよりて南へゆかし出る
はまくにあれは滝よまはし那智の峰山は下馬とよ
より杉の並木うちかこみて鳥井楼門奥深し
なかに入りて拝殿よりは一町余りをへだてゝぬまきて
滝の水とみて雨の降るごとく猛きさまに乗さるかな

ありとよれハ三重に張り落る瀧乃水の白き雲み
かれりきよくして更よその落るよハ見えし雫も
杉のかれをかの笠木の山よ巌よ崩れ落ちて並て
みえ候し

　　立ねよ一きちかゝる宇れ中よ青き那智の瀧ハ　青木
　　秋の空くもりて落るや瀧の色　紀内

瀧の本ハ仁寺上天皇御位に初て瀧と書於本を立てり
いふなる事や甚しきれしこのあたり人もなき
きハ見えてやみね代々の天子浄宗数多かうし中
みも花山院ハ籠りて山中なり御修行をはせ給ひよ

瀧の本尊よ九穴の如意宝珠を納めて一ツ山瀧
つくりの水をとるよ結ひしその本根乃形を成就
そしめしと御願の有まれて又くは文覚上人の
いさそうそかくきまし此瀧よ打れしとかひ如き
事乃色よろつきちらて十二所権現乃宮紀太士の事
ありとまく三山中一乃壮麗なり由しい那智の瀧と
いよ事を行ひかれよ今いきつゆ人の有ともえしれ瀧
なりていかよのとくの山頂ありのを打ちくて大事も
しの坂をのち上りよ二ツ子よ中けりよて日繞よ
まつくり見ものわハおやの松乃前よ立ちめて

一夜を明さんや然るにてよそり来りに彼の手みち
あきれも手しらず誰人か物しては其の名も見えられ
ものを書ようつくてきこえきれるてもみされ
て見ゆるもやうんなく囲炉裏に案内して彼を明ければ
甘し物ちりに山路に踏迷ひたる人の宿りして介れ
なりし衣もみ得しぬ白雲の立さえ見ゆる川岸のなく
きぬは行めるもいふなり山の上なる方をなり此の
秋風を吹く入る夜のここ詩よ寝ひく秋深きもなみ
東へと見てもすの来て行くもちるみえてさまる
に谷道いとかく草茂りなひ足の立ても見えず遙

椎栗の花やまきぬく梢も路

やまい小雨しるとと上つかた百五十
秋の空高し大雨小雨の
山中をわたりゆくとして湯の流まよ上つる者あり
出く湯あふれ温泉や川の中より湧出て湯気を
飛ちて折ひみ濃くし家々の女子ともの祝
業なる松入まなく花めしり湯のはま流れ出よく
老若も侍よ薬師の寺一字塔一基なり都の前よ
立る岩に一遍上人の書残し名号なり此人の
人多く詣りて来りて北中の別を果なり云々

よう面のうきれい音よい山山一望をやきめて山の
はれそそぐはしおわちきーちきーたい年そそぐはうり
空晴をれいりえそそけど旅うえの四をれて者と
数入りかえ紅のはの門と詠ーう一葉石門をそそく
陽門とやれこの者れめを陽門うえ日うえ孫きう
そて古物飛ををのよ長を得た
四日女夫坂を越て那中えうえ那中の王よ社宮
おう近霧い大崎宮をもんきうーー坂をれ只才う
住ーうえの来路を山そそけうよ家ふを王の
宮おう古ど伊幸の記ふをうえうえうーきれ名

おう柏十丈きうよ崎をを城り当門い山の奥う
物来城代山そそ門水とを面ををうーー
はーーあの押えけ歳ーー屋を
崎えを崎をそそ三頭のをうよ者にまを面
をうう山う
五日空四よーー四をの所とをれい清巴とうを
あきーを祈祈ををそそ藤房の中と家やを毋薄
仙をまのいうを山をれを仙の者れちきう
ををりて仙をう三熊野く山の紫ををうう
まて浦の清ーーき清仙ようーけををみをれる

みやし更草なりとぞきこえし
　涼けのや和歌浦の着もおほひ
南部より此方は三十三端し書かいけるかしのとの
浦辺に鳴つる人こそ見し　これ千里の浜もとの
ほとりなり岩代の峠に有馬の王子の結び松のゆかり
にて一本道の先に於まう　當帳好忠の子をしる我が物なれ
ばこれをよく見紀よみのえしたたりけれ今もそこの
名きこえたり
　見ぬかし　むすび松の名きこえ
切目の王子にはまく詠すもし詠　忠盛のこたま

うか浦辺に立寄秋の日せまくて日高川の名
高きゆかれ道成寺の何ともかれ川はるけし庄
して氷きけまし
　川端や寿よし寺のうなぎかなし
小松原といふ所にやられ後鳥羽院の御時寺の
ゆかりとひあらし不かわ
明れは道成寺にまいる女の身をしづめとうたし
語りて松原のほとりの藤白坂藤の坂山より
いふや修基の寺にあめの山をまく藤をはなく書の
ゆかりに皆の山のみとりはねてや藤も咲きしと

[illegible]入江の景色殊
[illegible]
[illegible]
鴨谷[illegible]代峠[illegible]
初宮浦[illegible]
[illegible]藤代[illegible]
[illegible]九千九[illegible]
[illegible]
初泉[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
七日朝[illegible]初宮浦布引の松
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ある人のいはく まへに高尾とて仏の出る立も
ゆめのてききはありて紀の川をわたりて根来寺の
ふもとかの道の間を四里ばかりのぼりて根来よりて
より山一つ隔れはやすくて寺にいたるめでたき山にて八
葉の蓮華のごとくありて谷にわかれてあつまれて
百あまりの山にわかれし谷々の坊舎はみなみなすべて
やまのうへにつらなりけるおほきさもいふばかりなき地
ぞありし萩もえて花咲(?)し 大塔金堂雖(?)あるの
不動堂のも我もとおもひぬ清の堂に丈六の仏の
並ひたまへるにあふぎて心ゆくしたがひかはる詣の者ら

おもしろきことおほかりなかなかなき
勝の花(?)も稲妻とともにゆきし
根来一山の衆徒寺を守りて闘争をもとし
至る数を招く叡戦をとりしあまたの衆によりてかく法滅に
及ひきたるそ悲しき いまし法流の一派の日出
多くかへし給はるのは

萱まじり紀今や唐の音をゆくしきあり
古寺や其の寺に出してあるぞなく　文下
粉川寺よりかの川十五六年前よりかもしく本尊
詣しまするも多く法仏の縁の始まる歓喜も

ちゝはいの門おとやうく〜こうの山ぢよりいまさうしまれ
して海ちかくなりしかとしもしも
八日明ぬうり毒をしのきていそうつ谷のをあるく海て
庵をしつらひ杉尾寺の奥しして山ぢよりもし
百十あまり尾よりをゆくよ遠よはうくく須ヶ
あるしの浦くもつくるめ寺の山道のたとく
しく節にも順礼うこにたまうこん
来しかれ杉原杉原
和泉の国樫山天野山行田蔵をくく上野高野
九日きのつゝ寺のあるの祝ひて有のあるしうち根なまの

姫ぢよ〜菊の花ものかくるこそ四ちてやうこれ
雲母をいうよ山茶の花
きのつくて松ちる菓のみるもう　文下
朝郎も猿も酔うや高野の者　郎氏

[illegible]

小倉山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

今八幡しはのきたはらまてゆくよ路へ出る葉内
しゆのあとつまびらかならずて東の方に
て浄照の寺法然のまつらなる寺あり
田ねまるその向に百舌鳥の陵の方へめぐりたる
しるし松のたてしまをちせし梢さるに住吉の社
千枝もろこしてんとろあり所石の池をとりて

ちくさいや茂せし住吉池の辺

新道のむかしよりの菱わ小笠の泉ありて來る頃

人あまりちりまうてにまるれて武蔵の国より都の春
秋の気しきのはりかまれ秋篠の久樹とらくものこしそ
いろとりのいろの程もころなるさむ醍醐笠とりのほとりの岩
なみちるあやかりてもうしいろの音とも君もち中よ

おもてなくもきと宮わたる秋しわらはまきしなきの山
来らくも

くの浅ぎりまつりにもろもろうつくしき袖まで緒虫とも
此国よりうてきのゆうわたく飯をとてものゆくはらわるて今
ふるきなりとらまいわてん手てハひとり都へつうろんまの人の

こころつよきものはかくしてゆかしと例の翁筆
うちかへして見れはかきて槐字ちる印と云ふをうつさんとい
さしうけして二の後れなきもしらむ西郊なれやうち
作は多く今ハ浮かるきへなりぬるはその何ともおのつからかり
しうろうもてゆく牛飼まて皮久桶のやうにし東坊と
いふに入るゆえのものちらむと上の寸へ此目るよ花の色
もせん翁栽の枝をうつし浮布れ氷をうたる横をれ花
まて翁のきぬまる白きをうつし雑きくるむやうなれはこころ

ありかし人もまことをもしめて見るる目もあやなりけるかの
こ役の優婆塞山をひらきし役ひしとはいふこの
祇のもとる人慧花和尚とゆかりもしめんさの威徳明王
の法行ひけむひし時まさ牛れ現しつるより牛飼と六
いふにまむ山せり現せる本尊堂塔建ならひける来
長まりもてそとしともの、香をる錢なりと見るに
茅渟男の拾ひしきくるち錢を圍棋の盤の上まて
わくる錢をうつし棋るなれ碁さくるもちして林

庭の興をもよほす事

西之方に数寄屋を建て山ちかくこの内のうへに池
又鬼とうの里まで迄つゝきて茅亭男ハ白うれて
帰る天皇ゟ下ゟ下ゟ迄六雅信敬の軍基て
畫あり堤あり中まで南殿の行宮の位なるてその
うへよりつゞなりて松皮ふくるこつ葉よりたる
池迄ゟけて月見なるまつ一面のあなるおく日
りて池燈の乳母のなるよ

燈籠しゝ色こうれまる所屋俊り　其内
中殿燈籠行裏寄とこの国ゟ出るせのつくりて
紫ゟ、きとうたのゟて一ゟ出のこうれるをうよ
是をあゝみのをもをゟ家あるて海ゟなるの敬こう
海まるゝの時ゟ行ゟれあハをゟもこゝ出なし天皇所
寺ゟ屋を醸ゟわをせて今ハをる事ハせられも
なを信房六十級宇敬ゟ三日市のうゟ出て歌ゝ
寺ゟ下ゟつゟのゟの一平ゟ実南俊敬を松屋の信敬も

せしもの[illegible]桜尾といふゆゑ[illegible]
の宮[illegible]十[illegible]あり[illegible]判官[illegible]建し[illegible]墓[illegible]
村上[illegible]後[illegible]の[illegible]
[illegible]この反[illegible]百五十[illegible]
[illegible]寺[illegible]楠[illegible]の墓[illegible]寺[illegible]
[illegible]墓[illegible]の[illegible]
[illegible]

第[illegible]

雨のふりいたる[illegible]八[illegible]の家[illegible]
[illegible]
[illegible]
早の城[illegible]
小初の[illegible]
よく[illegible]楠[illegible]の首塚[illegible]
[illegible]
[illegible]

うち佛ゐいまん觀音地蔵堂とて学ぶ社
なれ
てきてしよ里をなまに学もなれぬほとけ乃山
名うれは山とて八狐とかあたまして音ふ系絵
ゐ高坪の郷とて おもちたとぬる一ふとふ
山といふとく豆曽ふらふるかまわ乳、く東の
方へひとりまるとて切を小春の日新ぬるは
大和の国吳のトまわからうして言国表るの社
よりつ、言天寺とて学ぶ方ふるとろなちと

さまふしを凡ちりにちりてとあ里れ稲
ふちちもし門ふ高をふふ里の名を苗ふとれん
ふ
衣の名わをなうく水ふ新の蔦のお日ひふる
乳を出すしまふを用て飯てうの南乃縣とい
どふふの主ふしなれ

蔦もおわ　人を老ぬふ後ふ
七日ふふふわ松ぬもてゆく苦堂ほの下渕ふ
出ふ及霧ふふるにつふ余の川ふとおふふ

冬にや筏をわたしてをちわたるく　芭蕉

六月の板うれそてゝ雲母の橋もみちうしなはゝ

まうす花生垂のあいつもゝ花の宮たのむ林うゑ

ゝちよ伏せあうゝ御の象しうれ薪下して奏うゝ

まゝ休もこゝゝ流しハ門戸ちて鈴の音に雪ち

ちぶうゝに古屋の里ひゝ記

雪やとゝ戸もうゝあてゝ雄人　芭蕉

ゝゝしはまゝて国栖や夏無ゝ人なゝ毛し杉を

肩のうゝてこゝし女杉皮を肩ゝ者ゝ原をの

のこゝ字孫ゝの垂社ゝ至祢ゝ鼓の音なく踊拔

安祥の愛塚ゝ伊の護摩ゝく焼ゝゝて六月ゝ

百町ゝ月ゝて音ゝひゝゝの本れ葉のゝなゝゝおよ

ゝ出ゝの花ハゝゝのゝむ苔ゝ奥ゝの花ゝうゝて

春ゝゝなゝまゝゝ

ゝゝゝて奥にもれしゝ月ゝ

人の雪ゝある雪踏れゝ花のゝゝゝもかゝのゝゝ九

ある木の陰にうせたるあるを死の道ゆうしるべの
清水うまとりて木の花ふる酥ふ人も哀をそそのして
うゑの間ゝ枝をいとなんにまして冬の白雪
うゑたりて一きは水の白玉清くやどして出しと折れる
きし初ふる雨ふる人のうしまゝあを分うえて
おほ垂えだ松うひあり出せる

こゝろ樂のつもれる苦海の行路の行の形の孝を知る
唐もちたるる人あるうう辞しまるあやしの服

天物とうものゝ保らるまてあれるをそこにもとつふ
まて物うろしきたるはあら俗松人のあるの
ゆて己の木を引ゝくに苦清水をそこに分人とて
海まうし御ふらなりあり作者のふてまん
うまあ俗公武の門はしてばつ苦市こゝをを
きれしもまのあるわるの庵まきて上人の義りお
はし多とかゝけなき世界のあ作正しまもおれ
ゝうて汗あゆるまくうあをかく

清水寺にて我さへ[illegible]みそこもわ　三田
人しまもの　摺うちて山端のつゝゝゝゝゝ陰
力をのこまゝて　竹をまゝて　酌をして　松へも
きゝもらに二なきもみ月けうる　梅の枝をうゝゝゝ
よ枝をゝゝゝとゝゝつゝいゝてほの明る　入て代ゝ
あゝゝこのゝのゝゝゝゝゝ

月をながめくらしたるまくらのもとにうつ柱
のまくら

こうしのもとの秋風をえて古をもむくろをもこし
と久しかりうちもつまくをぬるる

ひかりて氣をもあるを枕もとにあるを見ひ
てうちに

おもかげをたちのうつるをはのくれ奥をさる

三芳野の花はをりもをりをりをつくる彼の
花もしろき根の嶽もえてあるまてあるしれ月
うを
られるのうちとよりもかなひてはるになるいつの通りあれ
枝をうつるれもひうをもになくてこの古野ちかハとあさ
らしられと咲ける花の白雪とよりあるをる
梢のあをなるなるうくひとつるまのひとをこて
はやし　ふ年の花ふ義をもるる遠のうへ飛ぶ歌よみ
あるをこれるはうるある人のうるをそれをわをもる

夏の秋やうと名付て法然さうしの四のふの障掛の
桂枝つきほうれ見るまてるいう名しきあるて伝授
為先の仏さまを背まを文まあきるものの名つきてえも
いつあるもるるこさたうゆくうの陰をまうしうひるきて
みうしの奥のもしきをみのなと慈能和上れる歌
まれぬるも簾ふう風をみうしめてと教政つのな
つうくるまなるあるひうむ風情もなう奥さむるこの歌
うるひちめてこのみのるる入りてう野るう杉るる
なう

の坊ふるるるる蕎麦のあうの陰世杉坊蕎麦のるるの
よりあうれなるるるしもうるるるるるる
うるあうは炭竈はられよう野ちん
うてくれ風呂をや尺うるむ
この方よりわも一年書うの杉野うるる
とハ此らの方くとよるるもうわるよる杉年樫るるくるに
世の中の花るるもよるるてよしめ、芳野なるるるるるる
このひねるるわるれと思日は作るるめ

人目まれしいとあはれとおもふ

八日宿のあるじまうでこられしまをちきうてさくら桜の
濱をうめてまうでらるるよ入れる所乃坪はなさうれ
まて言くの日うて多武峯よりいつ坊をひしてこの社
をたうあうるうるのみ乃利のちまうるいとまくおもう
しうあひて(御)て此さうをはくりてふうけの風不きれ
きの中まを輪の石をうるの石のれあてる重を坊を
上人ときうるも日なれあり(ま)うしきはうわ者猟さ

きうて西ゐれおきをせしとこ屋ハあをまのうしきれて
きうの石の階なるあるたみう芸技松の花まを
ひうこうの要れを高しを拾みうこのひしまの西うを
とをををあるあ程うほのせうたのれうとこを慚愧れお
ろあうきをしへんをてうう所あをや拾れうせたをれうんと
古徳のうろうしう程寿の明うこせうるして

きうをを中あの寿をうしふ

同うの宝

一ふの境政のおうをうにうしうしきはめうをうあを

秋の佛事に丹波を過せしよ長谷のうちを濃く黒く
ひろる夕日をうつして目下とひちらしハ和歌浦せん
と思を思ひる行かく冬のはなしひろめる有
ぬくもりの瀬の川岸ふる
九月の夏なんの世に貝殻をふく音ふ藤さえ
ぬるまを待ちて待ちの鐘はるかにきく
夕秋のよるをゆくのらを紫ていつも書行くはま
のうのうしあるまをろうれ遺老を鐘歌枕の

句をかなをといて作者をされいろ有ぬ
をまして所を九とろかるの言をまをしをまろと
も御供しいてゆるを言ある富の女れ名をは
して飯ぬをせをしおきは作者をれ
あをて所をまて久樹うのをんをれ言葉を
はるをうを歌を堂をかるとて回廊をのはるを山の
あを墓のを井の墓をまをしかは鉢日を二本の杉の墓
の作ををかをれな九映しををある朝のなを名

堂義の人の間まなきふ書もく物所めさまう味
酒のこ婦まなる布一間の社まもくゆ九人九の乳
塚の祝師まうくをかうて黄熱ま入て猫ほのゆう
の物まてふこと出て此の月ふまといひし後もうれえ
つうれてやいさうの形
十日高熱ふんふ薬のて朝いち女大ものくしろ弱ま
ひとこいまとりれとつるの熱紫ふまれ人の洞ものちと
いんもまものてふ乳ふ間のものまとまるふふな

るし書日此社を造堂のゆあるろまてあるうれ
ちく先祭ゆうれ下織のうあるうくうてう乳烏帽子孝
襖らてこなるんうのうきしをつもむうきれうくいよ
ものうなるうる伎法きお尺うまうしてう弁り
廉ものの人おうるいこまもあう侍ちむふうる優ふ法
沖のおうもいううてみゆ

立てうれく沖の面こを法震ふて
伊熱八無福寺の用此事なうるう久松と南大門のふお

芝かきなる佐保風ふく中をきくにつけ
の京へいくる寺しいかやの堂の扉さして法師をも
つきやうなくれを嵐のらひあをして宮ちわ吹てなし
寺の花嵐ふくひて新らの城のまにまに枯ぬ
十一日法隆寺此西里まをて此四の新宮をまつい
まつて[illegible]なれとを法華の会
いつまて世人のうわかへてのをうはをまれ此四川
あはうをうをし

おもみちおくの此四てしられる其色
竹岡の寺麓まをて四天王事あわこの二坊をうハ
稲荷みのうて都のうまてぐ[illegible]人多くうてさうを
の中をうなる法皇をこの秋ハ特をたをうえて美
も見れも野を抜をわなを見されをこの寺の四をうも
あをうし新なしとをうをうをうをうもなし朝の原も少
をうしをうをうをうをう

[illegible]

寺にはしるるもては乳のようにふるゆえ
[illegible]の正[illegible]
曼坂の塚[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

三夜の月の記

[illegible]
[illegible]
[illegible]

なるべきものいとやすく通さるべきものなれば地集
安万里あん僧和天皇代御僧わり御書状碎く西仏
ちゝしきゝやさて

御僧やちゝ我踏みて為すれば

大原野に春日の社よりあるべき后宮の事なれば
南都い道うきゝられいと家よ新請しなびくれれい
代に行幸行啓のあるべき世の事なるべきいとも
殺　殺すきいつく撤の詩なり
日こゝにおきてくる人を見たりられい瑞雄のあるべき
事のあるべきを若るべきて在平将の祈代うする

打ちもちまるべきなりれ山を小塔山といふ
勝持寺を若見れ社の西の山のあるべき所の人いあのもと
いつ文を野に花筆とて山にいと武へ行進賀の祈所
とや西行上人を世事に行てもまるべき人の事のそ
あるべき様の殺よ事あるべきやの間を始べし
事代歌文紛れ一の物のゆるべして老樹一本西
行庵の上事の所よあるべき光廣大納言れ山庵よ於ひ
大ゝれあるべきれ人の事あるべ桜を樹を山人を事よ行きて
と詠あひとや今ゝきれ四ひよあるべき我めるべ庵の
あるべきれ一所きに立るべかるべき心地そきゝれ

秋風や人すまぬ庵の戸入れつる

大原千句にて世を去られし連歌師

きりぎりす鳴けばもとの草山

と道隆法親王の養育なりし人まさに長晴子も世を

年月かくれ住みて山家の記を書給ひ

名をかの法い一世の作の精力をもて玄賓庵と名

付し谷水流れて水音清く木の葉の色

かすかなる人の住わびぬる庵の柴垣

脊かきに寄りてかすかに人もやすらんとの

石ずえにうゑおきしもとをもとの駅上岩を動い

さて書しも千代ふるあるてむ世をよ嬉しう

思へばまのあり山家の秋

さえ聖ひ住を寄れ苔の跡ふみよ茅生に紀せるあ

聖の月ものすごくやはり雅ひ住の中

僧ひ寄るよもすがら井入水にてあり鶏を聞くもかなし

まかりき所なり

世をいとふ人ぞ秋の水

山ずみのいかなるとうれしく音を上人とさしてこそ

ゆく年月移りまい山の寺にまいりかの家を

ぬきて奥の流れまいりて見て見る物よりもあり見よ

[illegible]
四十[illegible]
文の中に[illegible]
しもむへ[illegible]
きれい坊に入[illegible]
[illegible]
せ[illegible]
よ[illegible]
まつけ[illegible]
[illegible]

[illegible]
情[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]三峰[illegible]山の[illegible]
[illegible]や[illegible]霊[illegible]れい[illegible]の大[illegible]
[illegible]和尚

[illegible]霊[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]空[illegible]
[illegible]
[illegible]

池[illegible]
[illegible]苔[illegible]西国の順拝

[illegible]
[illegible]
[illegible]

海ハ大原四所の里をとなり叡山の麓なり
中ほど山寺孔山の奥にてやせ国の高部寺地とて天満宮
を祭り山ほとりにあり物さびたる森林
ようく池水をたゝへ四囲山羽衆師の森鳥羽四方西にて
一瞰よろこぶべき日吉参詣きい山清の美人いとなみ
門前をとおるよ桂川入口にて出る毎に拝さるよ
東南の方鷲峰山うたかた十四夜の月あるべき作む
ちう山おろしい本津宇治の大河落合て門前大江の
ほとゝ落ち矢流れるこゝなる流れ合て合波を
面白く日ぐれ山ぶかう八幡入洛ゆいとほ吉野の

有きあるを見るにうたに京にかゝまなしし笑し
俗ほどくよりの家よ待居ほ見ほ河合せ
まてあ野い去ゝ山ほて明の住ほ押ぬ
ぬるを過ぎ峰の山ほけあれい月ほ其の家ほうて
雪ほ山やしほれ山ほを考紀峰ほいい四の簾を
ほうきて見ほ曙のきほ見ほうこれ見ほうて丑
ほ見ほよう宿ほ給ほ屋ほ向岡中の法京の様ほて
拝ほ寺ほ出ほ井中ほう物ほ人ほのほ三の
水の流ほほほ人ほ男女ほれほみほる老ほ人の
寒の宮ほきほ山ほ日ほけほの人ほのほ人ほほ

寅の刻より行うて拝の奥入堂の辺の
[illegible]山の裏主永奥しいの
傍等蔵寺迄よりて[illegible]
[illegible]物相よ書[illegible]
物[illegible]吹墓[illegible]
別當行清の

[illegible]山おの手れ四年[illegible]
[illegible]今れ[illegible]
[illegible]の[illegible]六衛府[illegible]人等計裏を供奉[illegible]
[illegible]

故生川[illegible]
[illegible]羽[illegible]
[illegible]
還幸の式[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

上ちかき所に五十丁ばかりとおもはれて一つの峰あり
されば岡寺のうしろやまのふもとより法隆寺
水を掬して行くに桜井の里より東へ
あく南へ行く楽田上の山くに林麻くに里ほの里まで
くくくくうとうとうとあくてよりよりはるぬ
ふとほうくるふまるいけ御の柳下情とうれいこの
ほへうるかりけ やく柳よ風うきて石道うけ
かるるひたる足を洗ひ乾たる京より尾金寺
男ちはう誰うれをいうまひくまたてたてる
うかりてうれ酒飯きてめくようとう

物ちうのつを日うよりぬ先ふ塔のかうの積よ
ふたに背多うちかをそ夕雪立うめて井あうあく
雨に寄とて水のうとちはいうまぬよ御の白よ
背多の山ふう雨れうひわうほのめくて天的
なくかちうちう中輪入乳の清とふれい尾上寺柳出
寄まてもうもうまあうやうまるよ人ふうれも物よ
うまううくあちうよをせてなうあ五れいたや階
日の光うううう

御田のやド日戒せんや柳をは
時陰い二千あうう月の名ふ柳よ　尾金

名月や山伏の水を流れより　菊二

今宵月の興を見そなはして堂の東の方を
打つる武部の原氏の同しいるを動き出て見
やるに月もや三年をうたのうく杉籠の
梢をうまれ出るその影の古の如く名残おく
き入れはくく思ふ女房の山寺を義
うたてを賞れ月の湖水をうつれる紙なるあ
想観をあつて物語を書るとをうたた
名琴ばかの世を伝られしかのうれ和歌を
きもかくやわうきしし叫ぶこと語りあさいうの

古語をうく俗のいろうをうたをうたをなる
名月をうつる杜のうけ打をうを
月をうへ出るかや明るかや　瓦全

名月や古寺杜をうをうを　仏　菜二

ねをの梢はくに影をきて堂塔の梢門のあの
湖をのけよをうを所に国の津人海の家毎のいて
鶴をうを流をてをうて今はくい神社の梢をうや
と問をうとうをうを

名月や新和歌寺を門　舜也

月をうや水梅の京数をうを　瓦全

那やまぶき孟あきらてる閑の月　柿下

うれい喜ん山路よいうこうこうしぬれい情よ咏て
仏を安後よ寺ぬ義の中に心猿さいうく元の
音れ赤の間とくこう喜ゐ寺て作谷の信を
ちうりのきれ光量ゆ月思ひ子すれを愛イ
烟雲の病疾ゆ人のうちうち布の絵牧仁
中仏人間さめて又れい灯ゆ寺て部迦いうち
寺ゆく菊三い音紙とうてけうつき瓦金
智ようれく吹し柿下い重成拳ゆ生命の
一杯よ寺仁て寺四仁上ゆ仏情ゆく杯ゆく

推敲の字中ありいうく紀上きい法師のいきい
れさよく笑くれきく赤く雪の望よあとり月を
蒙て人くいゆしいて寺迦のあく雲岸入
杯ゆ寺うちよ寺る白殿の恐きすゆ加ゆて
方ゆ西の書戸よ月の前ゆうれまて加ゆ明をゆれ
十六日屋谷成分入く国多山よのあり幻住庵の記
寺又寺ゆの堀義仲寺ゆ寺て大津の部迦
寺よ咏ゆけく義月祝布の老人ゆ教アの月
いく又行よ何仁ゆうくいゆ行人ゆの教門を
又て三形れ與ゆ寺れ寺ん寺て三年の紀寺猫よ

和る二歩の品をかうしにい学かるる
いきるかやうの事ゆき

拾葉莊